

有漏・無漏の規定

加藤純章

asrava は a/sru (= 流れる) という動詞から派出する。恐らく元來は身体の各機官 (indriya) から流れ出る糞・汗・精液などの不淨物を指したと思われるが、既に初期の仏教で煩惱 (kleśa) 一般の別名とされていた。しかし原始仏教聖典には、かなり多くの asava の語が見られるにもかかわらず、その用法は意外に限られている。これを整理すると

- ① kāmāsava (欲漏)・bhavāsava (有漏)・avijāsava (無明漏) の三漏⁽¹⁾ 又は diṭṭhāsava (見漏) を加えた四漏
 - ② āsavānam khaya (諸漏已尽などと漢訳される)
 - ③ khināsava (得尽諸漏などと漢訳される)
- 以上のほば三点に分類出来る。又漢訳阿含經典で有漏・無漏と訳される場合の有漏は、相当するパーリ・ニカーヤ經典では sāsva のことはなく、ほとんど āsava であることも注意しておく必要がある。例えば雜阿含卷八の「若比丘得阿羅漢⁽²⁾ 尽⁽³⁾ 諸有漏」は相当⁽⁴⁾ パーリ文 Saṃyutta Nikāya 35, 134 である。bhikkhū arahanto khināsavaṃ vusitavanto である。

原始經典では、āsava と amāsava が相對する概念として用いられていたので、漢訳者は āsava を無漏に對して有漏と訳したのである。又漢訳阿含で「漏」「有漏」とあるものの相当⁽⁵⁾ パーリ文が āsava でないことも非常に多い。しかしながら原始經典に sāsva の語がないわけではない。Saṃyutta Nikāya 5 五取蘊 (pañcupādānakhandhā) や不放逸 (appamāda) を説明する箇處にあらわれている。ただその回数極めて少ない。以上のことから、原始經典では後のアピダルマでいう sāsva の概念は未だ起らず、煩惱を āsava と名⁽⁶⁾ け、これを三又は四種に分類し、これらを滅すること (khaṇḍiya, khina) が涅槃への道であると見なされていたということが出来る。

仏教教理の発達に伴い、āsava は他の煩惱の異名の中で最も代表的なもの⁽⁷⁾ と見なされるようになり、諸法を「淨らかなもの」「涅槃につながるもの」と「そうでないもの」に分類する上⁽⁸⁾、sāsva, anāsava の術語が造られたであろうこと

が出来来る。そして次第に精密な有漏法 (sāsavādhama) の規定が試みられるようになった。

説一切有部では、『大毘婆沙論』に於て次の五つを示している。①有漏法とは、諸有 (bhava) を養ひ摂益し維持する法、これに反するのが無漏法②諸有を生死の世界に維持相續させる法③苦集二諦に趣く法④苦集二諦に摂せられる法⑤有漏法とは諸漏 (煩惱) を増長させる法、諸漏を損減させるのが無漏法。以上の五規定は、次の法勝 (Dhamasresīhi) の『阿毘曇心論』に至ると簡潔に要約された。

有漏法とは、そこに於て煩惱を生ぜしめる法である⁽⁹⁾。即ち法勝に従えば、人がその対象を認識した時、その人の心に煩惱を生ぜしめるような対象としての法を有漏法というのである。この規定は優波扇多 (Upasanta) の『阿毘曇心論経』にも同様に受け継がれている。法救 (Dhamaratta) は『雜阿毘曇心論』に於てこの規定を更に改めて

有漏法とは、そこに於て煩惱を増長せしめる法である⁽¹⁰⁾。とし、彼以前の「煩惱を生ぜしめる」を「煩惱を増長せしめる」としている。この規定は世親 (Vasubandhu) の『俱舍論』でより明確に規定された。即ち

有漏法とは、その中で漏つまり煩惱が随増する (anusārete) 法をいふのである⁽¹¹⁾。

とし、更に又

有漏・無漏の規定 (加藤)

無漏法に対しても煩惱は生ずる (upajāyante) けれど、ただ生ずるだけで随増はしないから有漏ではない⁽¹²⁾。

と説明している。以上から有部では有漏法について『大毘婆沙論』の五規定から『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』の「煩惱が生ずる」になり更に『雜阿毘曇心論』を経て『俱舍論』に至り「煩惱が随増する」に確定したと見てよいのである。ところで玄奘の弟子普光の『俱舍論記』に次の記事があるのは周知の事実である⁽¹³⁾。

仏滅五百年に、Tukhara 国の法勝論師が『阿毘曇心論』を造り、その中で有漏法の規定として漏の随増 (anusārete) を創始した。仏滅六百年に法救が出て漏の随増 (anusārete) に改めた。これでは有部の規定に誤りがなくなり、世親も『俱舍論』でこれを採用した⁽¹⁴⁾。

しかしこの普光の伝承は、正しくないものを含んでいる。確かに法勝が漏の随増を提唱し、法救がそれを改め漏の増長を主張したかもしれない。しかしその際法救が随増 (anusārete) の語を使用したというのは事実ではない。何故なら『雜心論』の他の箇処で、当然 anusārete と思われる語を増長と訳さず他の訳語を用いているからである。元來 anusārete (3 pl. anusārete) は anusāya と共に用いられることが多く、『雜心論』の訳者は anusāya を使、anusārete を所使と訳している⁽¹⁵⁾。若しも梵本の有漏の規定の箇処に anusārete とあつたなら、

訳者は同じく所使と訳したことであろう。そうならつていないのは、原語が anusserate ではないことを示すものがある。つまりこの時法救はまた asrava と anusserate を結びつけて考えていなかったたのである。又この推定は他の資料からも支持される。安慧(Schīmanā)の俱舍論の註釈に、

ある師は「そこに於て煩惱が生ずる (skye bar hgyur ba)」、それが有漏であるという。又「ある師は」そこに於て煩惱が増大する (lphel hgyur ba)」、それが有漏であると説く。けれどもこのような意見を遮する為に……[随増する (gyas par hgyur ba) と説いたのである]。

この中、はじめの師が法勝(17)を、後の師が法救を指しているとみるのは妥当であらう。そうすれば、後の師の「増大する」の訳語が lphel hgyur ba となくつて gyas par hgyur ba (anusserate) とは故意に区別されていることは大いに注意すべきである。以上から法救は煩惱が増長する(恐らくは vardhate びあひら)ことを提唱したのは確かである⁽¹⁸⁾うが、それは anusserate ではなく、有漏の規定に anusserate をはじめて用いたのは『俱舍論』の世親であるということになる。ところで anusī (横たわる、付着する)には本来「増大する」という意味はない。この語は原始經典以来 anusāya と共に用いられることが多い。例えば sukhāya vedanāya nā-gāmsayo anuseti びあひら。有部の諸論書にも anusserate は

常に anusāya と共に用いられている。そして玄奘以前の漢訳では anusāya は使、anusserate は使、所使、堅著又は相著と訳されている。例えば『阿毘曇毘婆沙論』では anusāya の説明として、

堅著義是使義。乃至一刹那頃使一微塵亦於著。とし又他の箇処では

著義是使義者彼使於義堅著。猶小兒堅著於乳⁽¹⁹⁾とあり、anusāya を使、anusserate を堅著と訳している。これはその前後の諸論書でも同様である。この場合小児が乳に anusete する⁽²⁰⁾というのを「増大する」意にとる必要はないであらう。又若し anusete に「増大する」義があるとしたら、多くの漢訳者は「所使」とだけ訳さず一見して増の意のわかる文字を付け加えたに違いない。それ故『雜心論』までは、有部に於ても anusete を随増、増大の意に用いず、唯「著する」「anusāya の働きが起る」程の意にとつていたと思われる。しかし『俱舍論』の時代になると、この語は明らかに「増大する」意に用いられる⁽²¹⁾。玄奘は『発智論』や『大毘婆沙論』を訳するに当たつても、『俱舍論』の知識をもつて随増としてしまったのであろう。例えば『大毘婆沙論』の anusāya の項を三訳比較してみると、玄奘が anusserate を随増と訳してしまつた為に内容が合わず、説明を付加した後がみられるのである⁽²²⁾。

それでは、有部ではいつごろ anusete が「増大する」意に解されはじめたのだろうか。世親のカシュミール時代の師といわれる悟入 (Skandhita) の作とされる『入阿毘達磨論』には随眠 (anusaya) の説明として

或随増義是随眠義。謂於三取蘊三所縁相應而隨増故。言「隨増者謂隨三所縁及相應門一而增長故。」⁽²³⁾

と、以前のどの論書にもみられない anuserate の説明がみられる。この部分は玄奘の付加ではなく、チベット訳も同様であるから原文にあつたのである。従来は anuserate は「anusaya の働きが起る」意に用いられていたのが、ここではじめて「増大する」意に解されたのではあるまいか。それ故前代の諸論書の形式を破つてまで、anuserate の解説を加えたのではあるまいか。世親は『俱舍論』に於て法救の vārdhante の代りに恩師のこの解釈を採用したのでないだろうか。⁽²⁴⁾

このように世親になつてはじめて asrava が anusete するという規定が確立したのであるが、この有部の規定に反対した譬喩者 (Darsanika) の意見を『順正理論』は伝えている。

譬喩者説「無学身中及外器中所有諸色非三漏依²⁵故得²⁶三無漏名。然契經言『有漏法者諸所有眼乃至広説。』此非三漏対治²⁷故得²⁸三有漏名。」

有漏・無漏の規定(加藤)

即ち譬喩者によれば、すでに漏を尽した聖者 (arahat) の肉体を構成している物質及び、木や竹の如き外界の物質 (Balya-rūpa) は、漏の依り所になつていないから (anīrayatvā) 無漏であるという。又それと同時に、これらの物質は、漏を減するものではないから (apapīpakasatvā) (煩惱に向かいこれを減せんとするのは常に心 citta の働きであり物質 rūpa ではないから) 有漏法でもある、というのである。このように譬喩者の有漏法とは、漏の依り所になる法のことであり、これは上述の有部の「その中で漏を増大せしめる法」という規定とは全く異なる。又有部では無漏法とは「その中で漏を増大せしめない法」つまり道諦と滅諦なのに対し、譬喩者では、同一法が有漏にも無漏にもなるとするのである。

有部の規定に対しては、この他にも異を唱える人々が存したが、今は紙数の都合で他の機会にまとめて論じたい。

1 例えば MN. III. p. 99. 中阿含卷二〇(大一、五五七下)、MN. I. p. 35. 中阿含卷二六(大一、五九六上) 2 例えば SN. I. p. 146 別訳雜阿含卷六(大二、四一三七)、SN. I. p. 48 別訳雜阿含卷一五(大二、四七九上)、SN. I. p. 14 雜阿含卷二三(大二、一五四中)、3 この他パーリに相当句を見出せない増一阿含の爾時世尊説法。所謂施論戒論生天之論。欲不淨漏為三大患出家為要。がある。大二、六四九上、六六四下、六七二下、六七八中、六八三下、七〇八中、七五三中、4 例えば MN. I. p. 7

（増一阿含卷三四）¹⁷ 大正二七四〇中）¹⁸ SN. IV. p. 125（雜阿含卷八、大二五三下）¹⁹ SN. V. p. 8（雜阿含卷一八）²⁰ 大二一九九上）²¹ MN. I. p. 490（雜阿含卷四二）²² 大二三〇八中）²³ 例々 chanda (SN. I. p. 22) — 諸漏（雜阿含卷四八）²⁴ 大二三五四中）²⁵ nīramisa (SN. I. p. 60) — 尽於漏（別記雜阿含卷九）²⁶ 大二四四二下）²⁷ khīna-punabbhava (SN. 8. 7) — 有漏已尽（中阿含卷二九）²⁸ 六一〇下）²⁹ 9 Yam dīre santike vā sāsavā upādāmyam (SN. III. p. 47). bhikkhu cittaṃ rakkhati āsavesu ca sāsavasu ca dhammesu. (SN. V. p. 232) ³⁰ 大毘婆沙論卷七六）³¹ 大二六三九二中）³² 8 阿毘曇心論卷一）³³ 大二八〇九中）³⁴ 9 阿毘曇心論經卷一）³⁵ 大二八八三四中）³⁶ 10 雜阿毘曇心論卷一）³⁷ 大二八八七一上）³⁸ 11 āsavās teṣu yasmāti samanusērate. Kośa, p. 3, l. 11. ³⁹ 12 kāmam nirodhamaṅga-satyālabhanā api āsavā upajāyante na tv anusērate tareti na tayoh sāsavatvaprasaṅgāh. Kośa, p. 3, l. 12-13. ⁴⁰ 13 國訳大藏經論部十一 國訳俱舍論 p. 10. note 36. ⁴¹ 14 俱舍論記卷一 大四一 一一上）⁴² 15 雜阿毘曇心論卷四）⁴³ 大二八九〇二上中）⁴⁴ 16 slob dpon gshān dag na re gañ la ñon mois pa skeye bar *hegyur ba de zag pa dan bcas pa yin te. gañ la ñon mois nyhel hegyur ba de ni zag dan bcas par bñod ces zer ba de dag pañi phyir*...Shriamati, Pékin. vol. 146. p. 207.1-8-2-1 ⁴⁵ 17 Purāvardhana は前師を『古経部師』と説く。Pékin. Vol. 117. p. 94.3*8. ⁴⁶ 18 法救が煩惱が增長するところの決定は突飛ならぬことを。原始経典に於て煩惱は增長するべきものなりとす。dvīnam bhikkhave āsavā vaddhanti. AN.

l. p. 85). āsavā uppañjanti uppannā ca āsavāpavaddhanti. (MN. I. p. 7). ⁴⁷ 19 MN. I. p. 303 中阿含卷五八）⁴⁸ 大一七八九下）⁴⁹ 20 阿毘曇毘婆沙論大二八二〇〇上中）⁵⁰ 21 anusērate ti puñjīm labhanta ity arthah. Yaśomitra. p. 13. l. 3-4. ⁵¹ 22 毘婆沙論大二八四三六上中大毘婆沙論大二七二五七上中 ⁵² 入阿毘達磨論卷上）⁵³ 大二八九八三下）⁵⁴ 24 Pékin. vol. 119. p. 47. 2-2-3. ⁵⁵ āsavā v anusēte とを結びつけた世親の創見に対し、後代の Abhidharmadīpa の作者は語源解釈 (nirukta) の見地から用語が適切でなると批評し、anusērate と anusāya と関連して使われるべき語である。āsavā とは sraṇāti を用いるべきだとする。Dīpa, p. 18. そのところの意見は、仏教の伝統に合致してゐる。即ち Dhama-saṅghaṇi-Ājñāsālīni とは āsavagocchake *āsavantī āsavā. cakkhutopi*...pe...manato pi sandanti pavattanti ti vuttam hoti...āyatam vā saṃsāradukkhāṃ savanti pasavanti ti pi āsavā. Dhs. A. p. 41. ⁵⁶ 26 順正理論卷三五）⁵⁷ 大二九五四一上）⁵⁸ 同卷一）⁵⁹ 大二九三三二上）⁶⁰ 前師の譬喩者の説は俱舍論に於て有余師の説となつてゐる。Kośa, p. 197. l. 8-10. 更に Shriamati (p. 207. 3*2), Purāvardhana (p. 94.4*6-7) とする説は經 (mdo sde pa) の説に於てはさうである。Yaśomitra (p. 14. l. 13-15, p. 355. l. 22-31) と Darśāntika と呼ぶ。大毘婆沙論卷七六（大二七三九二上）⁶¹ 阿毘曇毘婆沙論卷四〇（大二八二九三中）⁶² の Buddhadeva の説、同卷四四（大二七二二九上）⁶³ 同卷二四（大二八一七六上）⁶⁴ の Maśāsāṅghika の説、Kahāvatthu IV. 3. p. 271-274 の Utratāpāhaka の説等。